

SNE 学会中間集会シンポジウム「貧困と特別ニーズ教育」の概要

◇2017年6月4日13:00~17:00、東京学芸大学にてSNE学会中間集会シンポジウム「貧困と特別ニーズ教育」が開催されました。本シンポジウムは、『経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト』を推進する東京学芸大学児童・生徒支援連携センター（CCSS）との共同開催で企画され、基調提案・シンポジスト報告・指定討論のいずれも双方からの登壇者で構成されました。SNE学会では「貧困と特別ニーズ教育」を『SNEジャーナル』第23巻特集テーマ、第23回研究大会の課題研究として設定していますが、当日約50名の参加者を数えた本シンポジウムは、それらの土台として位置づく重要な議論の場となりました。

◇基調提案では、まず加瀬進氏（東京学芸大学教授/本学会副代表理事）が『SNEジャーナル』がこれまで組んできた特集を整理し、マイノリティや貧困の問題について指摘はなされていたがきちんと取り組まれてこなかったことを指摘しました。その上で、「教育的ニーズ」と「生活諸領域におけるニーズ」の関係性を今後どのように考えていくかについての議論が不可欠であることが述べられました。続いて松田恵示氏（東京学芸大学副学長）からCCSSが推進するパッケージ型支援プロジェクトの背景と主旨について紹介がなされ、附属学校を地域拠点とした多職種連携に基づく放課後生活支援モデルの開発等について報告がなされました。

◇シンポジウムでは4名が登壇し、はじめに栗木美代子氏（パッケージ型支援プロジェクト専門研究員/小金井市・国分寺市SSW）から支援事例をもとにしたSSWの役割と貧困支援の課題について報告がなされ、物的貧困だけではなく、心を満たすことや自分の状況を周囲へ訴えてくことが困難であるという環境面での課題が貧困の連鎖へつながるのではないかと指摘がなされました。

続いて竹鼻ゆかり氏（パッケージ型支援プロジェクト/東京学芸大学養護教育講座教授）は「学校における貧困の見えにくさ」が課題であるとし、教員養成における「貧困」の現状と支援策にかかわるカリキュラム開発と子どもの貧困に関する調査研究が不可欠であることを指摘しました。

小野學氏（SNE学会会員/パッケージ型支援プロジェクト特命准教授）から小学校での支援体制モデルと支援事例の報告がなされ、貧困環境にある子どもが示す兆候が被虐待児の兆候と近接しており、反社会的行動や非社会的行動の背景に貧困が存在しているという気づきの視点について提起がなされました。

最後に小野川文子氏（SNE学会理事/名寄市立大学健康保健学部准教授）から障害児とその家族の生活実態調査に関する報告がなされ、障害児やその家族は日本の家族依存型福祉制度の中で生活の質、人間関係、社会性などを含めた「生活と発達の貧困」状態にあり、虐待、いじめ、自殺、不登校、非行等の問題にも「貧困」があり、発達の困難のある子どもにおいてはハイリスクとなると指摘がなされました。

◇指定討論では、馬場幸子氏（パッケージ型支援プロジェクト・東京学芸大学生生活科学講座准教授）は、とくに貧困の発見に関する議論について、貧困のサインに気づくことができる養護教諭養成の課題、特別支援学校と地域の連携状況、SSWの関わりによる教員側の意識の変化について問題提起しました。

続いて村山拓氏（SNE学会理事/東京学芸大学特別支援科学講座准教授）は、とくに支援の中で子どもに「溜め」をつくる重要性の議論から、他職種を理解できる人材養成のあり方、家庭・保護者への働き

かけのあり方、行財政研究の展開の必要性について問題提起しました。

◇最後にシンポジストを交えフロアからも活発な意見が出され、とくに養成・研修・カリキュラムの課題、学校教員に求められる役割の範囲に関する研究の必要性、「貧困」と「特別ニーズ教育」の両者をつなげるための発達支援と教育条件整備の課題、守秘性の高い問題を学校と地域でどのように共有できるかに際した社会教育のあり方の議論の必要性、超領域・複合的課題に研究（研究者）が対応できていない課題等について議論がなされました。

シンポジウム終了後にささやかな交流会を開催しましたが、ここにも参加者の半数以上の方が残られ、19時まで和やかに賑やかな議論が続き、SNE学会中間集会は無事、成功裏のもとに終了しました。

（文責：石川衣紀理事）